「隠者の夕暮」における教育・人間・自然の問題

下山田裕彦

一体、ペスタロッチが今なを教育研究家の中で多く語られ、問題にされる根本的理由は何であろうか。ペスタロッチの教育思想には激動する現代の教育問題を解く鍵がひそんでいるのであろうか、これこそ私が再び「夕暮」を中心に彼の教育論を取り上げた理由である。

さて、ペスタロッチの三十四才の処女作「夕暮」は、多くの研究者が指摘しているように、確かにそこには彼の確信に満ちた人間教育論が展開されているが、はたしてその具体的内容とその確信の根源は何であったか、私はこの点に焦点を合わせて以下論をすゝめてみたい。

彼は若き日、かなり過激な思想を持っていた節があるし、一時は法律の勉学を思いたった程、社会改革への情熱をかきたてられていた。しかし次第に彼の希望とは反対に彼の生涯の方向は教育実践家へと向っていったし、彼の思想は、人間性の奥底に秘む、いわば人間存在の本質を問いたゞすようなそれへと深められていった。

それは彼の幼少年期の環境がそうさせたとも言えるが、とりわけ彼の人間性が、貧しい者、力弱き者への深い憐みと愛に、おのずと向けられたという、生れながらの天分にあったと言えるだろう。彼の人間性は、ある時は愛の心で満ち、又ある時は憤りの心で満ちたが、それもひとえに彼の深い人間理解からであった。

彼の人間把握は決して、抽象的な机上のそれではなく、彼をとりまく、生きた人間からされていたと言える。それ故に彼は、当時の指導者的立場にあった学

者、政治家たちの、あまりにも、現実の問題を無視した、又、自己の社会的地位に固執している姿に、「学者たちは何故それを私たちに教えてくれないのか、なぜ世のお偉方は、彼らの同類である人間が何であるかを知ろうとしないのか」（梅根訳11頁）と、こらえきれない激しい怒りの情をもって罵倒している。

このような怒りの言葉は、又「あなたがたのお慈悲は、はたして民衆の賢明な司牧者としての慈悲だろうか」（梅根訳12頁）と、既制の伝統的なキリスト教会へのぬぐいがたい疑いにも変ってくる。彼は祖父を牧師として、彼自身敬度なピエティズムの中に幼少年時代を過した人物ではあったが、彼の鋭い良心はもはや、ありきたりのキリスト教には活きた信仰が消え失せていることを感じさせるのであった。が、それは彼を信仰の世界から追いやることにはならず、むしろ彼は一途に、人間を根底から価値づける活きた信仰を新鮮な心でさぐりあてる為の忍耐強い努力を忘れなかった。

「神は人類ともっとも身近な間柄にあるものである」（梅根訳25頁）ということこそ、彼が全生涯の教育活動を通して動かない確信であった。これこそ、まさしく彼の教育思想にみられる「近接」の原理というべきであろう。注(1) 即ち、神の親心に応答する人間の子心こそ、神と人類を身近なものにする絶対不可欠の条件である。この関係が正しい、揺がないものである限り、「動じない平安と力と知恵とを得ることができるのである」（梅根訳25頁）という。

彼はこのような絶対的強さと確信の基礎から、教育の本質を問い続けたのであった。とする時、彼にとって、人間教育の目的とは何であったか。

彼は、「この人間性の内にひそむ諸力を純なる人間の知恵にまで、万人をひとしく高めることが、もっとも下層の人々をも含めて、すべての人に共通な一般的人間教育の目的である」（梅根訳20頁）という。そして彼が言う「知恵はいっさいの人間のしあわせの源である」（梅根訳26頁）が同時に又、「どんな地位、どんな低い地位にある人にとっても、彼らを幸福にする為の贈ものであ

ある」（梅根訳21頁）そればかりか「力にみちており、感情のこもったものであり、そして堅実な応用力がある。ということがこの知恵の特徴である」（梅根訳14頁）とも言える。

しかし彼の人間教育論の本領はむしろ幸福の源である知恵が特に貧しき民衆の知恵になりきっていないことへの激しい怒りにある。それは支配者の親心の欠陥からである、と言える。梅根氏が「〈親心〉をふりかざして当時の政治家の悪と正面からとりくみ、仮借するところもなく彼らを罵倒し、その反省を求めてやまなかった彼の姿勢はけっして前近代的などといちがいに冷笑し去るべきものではなかろう」[注(2)]と言うのはその意味で正しい。

「高き地位にある人々よ、あなた方の持っている大きな能力をこのような目的に向けるがいゝ」（梅根訳38頁）と言う彼の言葉も人間性が発揮出来ないまゝじっと忍耐している貧しき人々への声と理解してよいであろう。とする時、「夕暮」の底流には彼の絶対的と言ってよい程の高き豊かな人間性に対する理想とそれ故にこそ低き民衆への深い愛と憐みが同時に在ることを吾吾は知ることが出来る。それ故に、高き地位にある人人の人間としての真の精神は「弱きをいたわり、己れの力の発揮に当たっては親心を以てし、親らしい目的を以てし、親らしい犠牲の精神をもってすること」（梅根訳38頁）ということになる。

さて、彼の言う「ほんとうの人間の知恵」は確かに彼のさぐり当てた人間教育の目的であるが、それはどのようにして形成されるのであろうか。即ち人間教育の具体的な場は？このような問が問われるのは当然であるだろう。次にこの問題を考えてみたい。

「ほんとうの人間の知恵というものは、自分のもっとも身近かな境遇についての知識と、もっとも身近かな問題を処理する練達した能力とを土台として成り立つものである」（梅根訳14頁）と言うがこの言葉の内容はきわめて深い。何故なら彼は人間の生活を高め、そして豊かにするものこそ人間教育そのものの内容であっ

て、人間教育の基礎であると理解するからである。即ち「知識」も「能力」もそれが人間性を豊かに高める限りにおいて重要な意味を持ってくる。「専門的知識は人間の具体的生活の求める豊かで柔軟性に富んだ自由で融通性に富んだ知恵とは縁遠いものである」[注(3)]と梅根氏が布敷しているのは、はなはだ的を得ている。

彼は何故にかくまで人間性を高め豊かにする人間教育を最重要と考えたのであろうか。何故ならば「高い地位にある側の者に純なる人間性が欠けていたら、彼は黒い雲に包まれるにちがいない」(梅根訳21頁)からである。彼の最重要関心は「人間性にひそむ諸力を純なる人間の知恵にまで」(梅根訳20頁)高めることであった。それ故にこそ「何らの興味もよび起こさず、何の役にも立たない、真理のただの喜やひびきや言葉に向かって人を駆りたてること、幼い人たちの全力を、こちこちの片よった学校教師の偏見に引きずりこむこと……これらのすべては、人を、骨折って自然の道からふみはずさせるものである」(梅根訳16頁)と言う。彼は人間を人間たらしめる教育を自然の教育法・自然の教え方と言うが、一体、ペスタロッチにおける自然の概念とはいかなる意味が含まれているのであろうか。吾々はこの問題を解くことなしに彼の教育思想について語ることが出来ない。

周知のごとく教育における自然の問題は古来多くの思想家達が探求しつづけてきた。例えば宗教改革者ルターの場合、彼は神の立場から「人間自然」の問題を捕えているが、そこにみられる「人間自然」とは「堕落した人間」という意味が圧倒的に強い。[注(4)]ルソーの場合には「人為」と対立した「自然」であり、その意味は「自己」であると言われる。[注(5)]が、彼の場合、特にそれが彼の中心的主題であった「人間」の問題と深い関係にある。即ち彼の言う「自然」の問題は究極的に「人間自然」(Human nature)のそれである。[注(6)]そして「人間自然」の問題を追求してゆく時、そこには人間における卑俗なもの、即ち悪契機をも意味する動物的

心理的側面と宗教的意味をも含んだ道徳的倫理的側面の両面がある。

デレカートはこれを低次の自然・高次の自然と呼ぶが[注(7)]いづれにせよ重要なことは「夕暮」にみられる思想そのものは信頼に満ちた人間肯定の基礎にあり、「人間自然」の倫理的側面が強く打ち出されているということである。何故ならペスタロッチが人間教育の問題を追求した基盤は「神との身近かな関係」からであり、そのことの故に彼は人間教育を絶対的な高さ、即ち「人間自然」の本来あるべき究極的理想の姿から理解したのである。

「人間自然」の究極的課題はいかにして親心・子心の内容である愛と信頼が回復されるかにあった。なる程、梅根氏が言うように「夕暮」の中で彼が提起している問題は親心の欠如、特に支配者のそれである、[注(8)]が、彼が求めてやまなかったのはそれにもまして人間が「神との身近かな関係」をとりもどすことにあった。ということは人間関係が親心・子心の関係であり愛と信頼の関係であるからである。そしてこの関係は根本的に絶対他者たる神との呼応関係に根拠を持つからである。[注(9)]彼のこの根本的思想こそ今尚研究されなければならぬ理由であろう。

これはさておき、興味深いことはシュプランガーも指摘するように彼がフランス革命を彼自身の眼で確かめた時、彼は隠すことの出来ない動揺を全身で体験したことであった。即ち血と血を以て争われる革命を通して、やはり人間にひそむ悪的な何物かが、社会秩序の崩壊や建設とは無関係に厳然と存在することを知ったからである。そして前にもまして「人間自然」の問題を真剣に考え始めた。「人間自然」の中には容易に肯定することの出来ない何物かがひそんでいること、そのことの故に「人間」の問題がぶきみに彼の中心に迫ってくるのであった。彼はこの時点で始めて人間の罪の問題を取組んだと言える。この問題こそ彼が「探究」の中で追求した問題であったが、彼はついに「自然的人間」と「社会的人間」を止揚した「道徳的人

間」を人間存在の理想的人間像と把握したのである。

しかし「夕暮」にあっては彼の思想はそこまで到達されていなかった。34才の彼の眼には人間教育への絶対的信頼と可能性が輝くばかりに映じたのであった。そして又、後年の作品に多くみられる「社会改革」への激しい意欲はまだみられない、とも言われる。それを以て彼の思想は概して家父長的であるとも指摘できよう。然し「夕暮」と同時代に書かれた「わが祖国の自由について」は「夕暮」を理解するには見逃すことの出来ない作品である。否むしろ「夕暮」の正しい理解は「わが祖国の自由について」の解釈にかゝっている、とさえ言える。(注10) 又「立法と嬰児殺し」も実にフランス革命以前に書かれた作品である。この二つの作品に流れている彼の血の出るような激しい叫びをみる時、「夕暮」の思想を保守的・家父長的であると簡単に結論づけるのは誤りである。

「夕暮」の基調は彼の確信に満ちた人間教育にあった。それは「人間」に対する深い愛の故に「人間」が踏みつけられ、しいたげられていることに何としてもじっとしていることの出来ない人物であったからである。だからこそ彼が当時の学校教育を広くみた時、そこにある教育の現実は「初めから口先ばかりの説教や、さまざまの意見の入り乱れる中にとびこみ、現実の事物に基づく真理の代わりに、ただの音声や話や言葉を自分の知性発達の基礎にし、自分の実力を培う最初のやり方」(梅根訳15頁)にしている、と言うのである。

彼は「とりとめのないごたごたの知識をたくさん知るということはけっして自然の道ではない」(梅根訳17頁)と人間教育の絶対的重要性を終始一貫説いてやまないのである。

彼は職業教育も身分教育も「人間教育の一般的目的に従属していなければならない」(梅根訳21頁)と言う、彼が願ってやまなかったのは人間が人間として教育されることであった。人間が人間として教育される最もすぐれた所は家庭である。

家庭における人間関係こそ彼の言う親心・子心の関係を最も具体的に実現出来る所であり、すべてのしあわせのもとである。彼自身の言葉を以て言うならば「人類の家族関係こそ、自然の作った最初にしてもっともすぐれた人間関係である」（梅根訳23頁）と言うことになる。梅根氏が指摘する通り彼は生涯この思想を大切に守りつづけた。それ故「人間をその職業や身分に適するように教育することは純なる家庭の幸福を味わうという究極の目的に従属させられねばならない」（梅根訳23頁）のである。

このようにみてくると彼が生涯問題とした人間教育論の内容が明確に浮かび上ってくる。即ち彼の「人間」理解は「神との身近かな関係」を根本とし、他者との関わりから、身近かな人々との関係から把握されている。そしてそこにこそ「人間」の問題が常に新たなる課題を担って登場するのである。即ちそれは今まで問題にしてきた二重の意味をもった「人間自然」の問題である。彼は「探究」の中で「人間自然」を「我欲」と「好意」の両面から捕えているのは、「我欲」が動物的心理的系列下にあり、「好意」が道徳的倫理的系列下にあるからである。この問題については他日改めて追求したいと思うがペスタロッチが問題にしている自然は彼の人間教育と密接な関係にあることは明らかである。

教育・人間・自然の問題は「夕暮」にあっては混然としているがこの三ツの問題こそ彼が生涯かけて追求した問題であり、それを彼の福音信仰から把握することなしには、彼の人間教育論が現代に生きる吾々に積極的に意味を持ってくることはないであろう。

注

(1)拙稿「ペスタロッチ教育思想研究」――「近接」思想を中心に――参照

(2)梅根悟「政治と教育」一四六頁

(3)右同　一二〇頁

(4) Delekat; Johaun Heinrich Pestalozzi: S97.

(5)桑原武夫編「ルソー」八八頁

(6)岩崎喜一「ペスタロッチの人間の哲学」四五頁

(7) F.Delekat;S100.

(8)梅根・一四六頁

(9)拙稿「ペスタロッチ教育思想の基底にある人間観の特質について」参照

(10)長尾十三二「教育の歴史的研究」(教育学全集Ⅰ)所収 三二九頁

参考文献

(1) F.Delekat;Johaun Heinrich Pestalozzi.Leipzig 1926

(2)梅根悟「政治と人間」明治図書一九六五年

(3)教育学全集Ⅰ 小学館 一九六七年

(4)岩崎喜一「ペスタロッチの人間の哲学」牧書店一九五八年

(5)桑原武夫編「ルソー」岩波新書 一九六六年

(6)東京教育大学大学院教育学研究集録5・6巻